野入直美 著

『沖縄―奄美の境界変動と人の移動 ――実業家・重田辰弥の生活史』

（みずき書林，2021 年，四六判，368 頁，2,800 円＋税）

安井 大輔
（立命館大学准教授）

本書は，移民研究，沖縄研究を専門とする著者による，奄美にルーツをもち，満洲で生まれ沖縄で育ち東京で起業し，境界を超えたビジネスネットワークを築いた実業家・重田辰弥氏の生活史である．

第二次世界大戦後の米軍統治が終わり日本政府へ施政権が返還されたのは，奄美群島が 1953 年，琉球列島が 1972 年である．この間，在沖縄の奄美籍者は「非琉球人」の「日本人」となり，軍雇用・公職，国費留学受験資格・奨学金制度，米国留学，集団就職と海外移民などの制度から排除されることとなった．本書では，期せずして「日本人」となり沖縄から東京への進学・就職を経て経営者として成功した個人の経験をとおして，「琉球人」/「非琉球人」の境界変動とそのもとでの人の移動が解明される．

本書は，二部構成の全 14 章からなる．一部は重田氏のライフヒストリーである．現在から過去に遡り氏の人生が聞き取られる．第 1 章は，会社を承継したあとガン闘病記をブログ発信する氏の現在が記述される．第 2 章は，就職し IT 企業を起こす経緯と沖縄からの雇用ルートの形成が語られる．第 3 章は，沖縄から東京への上京と進学の経緯である．大学では，奄美出身者として沖縄出身者向けの奨学制度を受けられなかったにもかかわらず，クラスメイトからは「沖縄」出身者とみなされることがあった．この時期に氏が抱いた「違和感のようなもの」は原体験として氏の人生の資源となった．第 4 章は，氏の両親の移動経験とハルピンで生まれ大連で育ち，奄美と那覇市・安謝で過ごした氏自身の少年期の経験が語られる．第 5 章は，氏が形成してきた沖縄ネットワークについて語る章である．

二部は論考篇として，一部で語られた内容について境界変動に関する視点から分析が加えられる．第 1 章は，氏の母親の本土出稼ぎに続いての満洲への結婚移住という経験から，移動の連鎖，戦前の女性にとっての紡績女工や女中の位置づけを考察する．第 2 章は，徴兵後に渡満した氏の父親と父を支えた奄美大島の父の兄家族との関係から，植民地への空間移動と階層移動が島の同族文化と関連づけられる．第 3 章は奄美の漁業史より，鹿児島（本土）から奄美に伝えられた近代型カツオ漁業のリーダーが氏の父系血縁だったことが，のちに氏の本土移動志向をもたらす文化的背景として読み解かれる．第 4 章は，氏の両親の出身地である奄美の瀬戸内町の過疎と高齢化の現状が紹介される．

第5章では，氏が幼少期を過ごした那覇市・安謝における異文化接触の様子が描かれる．ハルピン生まれ大連育ちで奄美への引き揚げを経て沖縄に移住した氏が過ごした町は米軍基地と隣接するコンタクトゾーンだった．植民地都市で氏が身につけた標準語は，コロニアル空間である沖縄で氏を生徒会長に選出しうるような文化資本となっていた．境界変動が考察されるのが第6章である．奄美籍者として琉球政府の国費留学・米国留学の制度から排除されたことについて，「それほどの苦痛はなかった」ものの「現実には壁があった」と語る氏は，上京し早稲田大学に進学する．沖縄では「（奄美）大島」，東京では「沖縄」と他者化され，学生時代は沖縄系の組織や集まりとは距離をおいていた氏は，起業後は積極的に県外，海外の沖縄ネットワークを構築していく．とはいえそのネットワークは関東の経営者だったりIT関係の集まりだったりと，沖縄の集まりでありつつも従来の沖縄県人会活動には収まらない多様な関心や個性に応えるものであった．著者は，氏のネットワークが多拠点型になった原点に「違和感のようなもの」が影響しているのではないかと推測している．第7章は，氏による沖縄からの人材採用活動を，戦後の沖縄における人口移動や階層分化と関連づけて分析している．第8章は，沖縄移民とその子孫を中心とする海外在住者たちである「世界のウチナーンチュ」によるビジネスネットワークWUB（World Uchinanchu Business Association）を事例に，同郷集団と企業経営の関係が論じられる．第9章は，結語として本書全体の論考がまとめられている．

氏の移動は《沖縄―奄美》が中心にありつつも，両親のルーツや配偶者，後年の活動まで含めると，奄美―満洲・大連―《沖縄―奄美》―東京・金沢―ハワイ・ブラジルとより広がりあるものとなっている．本書からは，ワイドな歴史や空間における人の移動のもとで社会変動がいかにして個人の軌跡と交錯していくかを読み解く生活史研究の醍醐味を味わえる．章の間には，氏の会社の元社員，親族への聞き取りと，氏自身のコラムが寄せられており，読者は移動する人の多層的な経験，氏の形成したネットワークの妙を体感することができる．特に氏自身によるコラムが量・質ともに充実しており，本書をユニークなものとしている．

奄美と沖縄そして本土との関係について，どこか1つに凝集せず，それぞれに拠点をもつことがよかったと氏は語り，著者も《分散系》のネットワークを有効なものと受け止めている．「植民地文化」や移動の経験を個人的な財産として活かしていくこと，重田氏がそれをなしえた人物であることは疑いない．ただし境界間の移動の経験は多様だ．人により移動の意味，「違和感のようなもの」の位置づけは異なるかもしれない．「違和感のようなもの」が「文化資本」となる場合とそうでない場合があるとすれば，その違いは何によるのだろうか．そんな疑問も脳裏に浮かんだ．氏以外の「いろんな経験をしてきた人」の話もうかがってみたいが，これは後続に課された課題となるだろう．個人史をもとにした研究として移民研究に新たな一冊が加えられたことは確実だ．沖縄や奄美に関心のある人や移民研究者はもちろん，広く多くの人に読んでもらいたい．